

【②見方や考え方—B：授業をつくる教師の視点】

■自分の主題をもつ

—子どもの「思いを深める」ために—

子どもたちに図工や美術の作品を制作させる上で、「自分なりの主題をもつ」ことが大切である。そのためには、特に「モチーフへの大きな感動」が作品制作への意欲化を図り、「自分なりの主題をもつ」大きな要素となる。そして、その主題（思い）を深めるために、視覚的な体験の豊かさや技能的な体験の豊かさ、素材体験の豊かさが、さらなる制作への「思いを深める」活動へとつながっていく。

また、その思いは制作を進める中でさまざまに変化し、感性を深め、作品の完成へとつながっていく。ただ、すべての子どもたちが、作品制作の初めから自分の思いをもち、制作を進められるわけではない。逆に、指導者が作品制作の初めの段階で多くのことを子どもに望むことが、図工・美術嫌いの子どものつく原因となる場合もある。特に、中学生の発達段階ではこの点が顕著に現われる。

漠然とした作品へのイメージであっても、制作しながらイメージを深めさせ、一人一人の感性を信じ、感じたことを素直に表現させることも重要な方法である。

このように、子どもたちの「思いを深める」ためには、①視覚的な体験の豊かさ、②技能的な体験の豊かさ、③素材体験の豊かさ、④制作しながら感性を深める、ことが大切であり、四つの観点が互いに関連しながら豊かなイメージとなり、「自分なりの主題をもち、思いを深める活動」となる。

子どもたちに図工・美術を学習させる上で指導者は、この四つの観点から指導方法を整理し、具体的な指導の手だてを考え、充実させていくことが大切である。子どもたちの「思いを深める」ためには、子どもだけの活動に任せた漠然とした指導ではなく、指導者の「形ある指導」が望まれる。

【主題をもつ】	【思いを深める】 (感じる、発想する、構想する)	
題 材 ↓ モチーフへの感動	① 視覚的な体験の豊かさ (見たことがある)	発 想 ・ 構 想 す る
	② 技能的な体験の豊かさ (やったことがある)	
	③ 素材体験の豊かさ (使ったことがある)	
【制作する】 (感性を深める)		

よねもとけいいち
(米元慶一：千葉県松戸市立第三中学校教諭)